セレンディピティと連想の行き着くところ

札幌市医師会
柴田（しばた）　睦郎（むつお）

能登半島地震

令和６年１月１日16時10分頃に発生した最大震度７の地震で、石川県輪島市や珠洲市中心に多数の死傷者を含む大きな被害が報告された。直後より住民は元より関係諸機関、交通手段を得てからはボランティア諸氏も加わり、復旧の努力が続いている。現在はライフラインや社会生活の復旧・復興及び再生の動きが本格化している段階と評価されている。

同年２月23日の天皇誕生日に陛下と皇后様を撮影した写真には、机の上の石川県の工芸品である輪島塗御懐紙箱や、隣の棚の珠洲焼窯変壺が映り込んでいた。国民の幸福を祈る今上天皇の思いの表れの様に思えた。元参院予算委員長の二地域居住「能登モデル」を巡る無配慮な発言を思い出す。

輪島塗職人の言葉遊び

輪島塗で思い出すことがある。2006年刊の岩波新書　阿刀田高著　「言葉遊びの楽しみ」に能登の文芸だんだらに関して、木村功著の「不思議な日本語段駄羅」と、中村裕編の輪島段駄羅同好会冊子が紹介されている。一例は下記のとおりである。囲碁に関する一句であろう。「よう」は良くのウ音便である。第二句が二重の意味を持つ。

甘党は羊羹が得て
　よう考えて　石を置く

江戸時代に俳句から誕生し能登の職人や商人に親しまれ、現在は輪島地方で愛好されていると言う。

日常生活の文芸

江戸から輪島に俳句から形を変えて伝わった段駄羅の連想で取り出した本がある。それは、1967年発行の鶴見俊輔著「限界芸術論」勁草書房である。芸術の発展の章末に芸術の体系という一枚の表があり、行動の種類　書く→読むの欄に限界芸術（手紙、ゴシップ、月並み俳句、書道、タナバタ）、大衆芸術（大衆小説、俳句、和歌）、純粋芸術（詩）という分類が提案されている。その中に日常生活に深く根を持っている芸術と関連するものとして、宮沢賢治の修学旅行復命書が引用されている。この修学旅行は1924年５月19日から23日にかけて、花巻農学校生徒と一緒に来道した際の記録である。札幌では北大植物園、札幌ビール工場、北大農学部、中島公園などを訪問している。

宮沢賢治イーハトーブ札幌駅（石本裕之著　2005年響文社）

鶴見俊輔は前述の書で、宮沢賢治が岩手県の個性的なマイナスをすべてプラスに変えて作り出した理想郷を「イーハトーヴォ」と呼んでいることを述べている。この本の著者石本裕之（旭川高専教授）は、賢治が三度（自分自身の修学旅行、引率した花巻農学校修学旅行、妹トシとの旅行）来道した際のイメージを詩作に活かしていることを示している。この本の発行者は、高橋哲雄響文社社長である。

年度報告書の編集

今から30年程前に、勤務先で年度報告書の編集委員長をすることになった。何事も形から入るたちなので、校正の通信教育を受けることにした。

報告書には必ず統計が載るが、以前に実務統計の通信教育を修了していたので、数字の扱いにはある程度の自信があった。この講座の成績が良好であったので、生涯教育２級インストラクターの資格取得の勧めがあった。この報告書の外注先が札幌の出版社で、担当は高橋哲雄さんという方であった。何度か打ち合わせをしたが、その時の雑談で、高橋さんが響文社の社長さんで、朗読CD付きの詩集を発行したということを聞き、その斬新さに感心したことを思い出す。後に私は趣味の川柳の句集を川柳専門の出版社から出すことになるのだが、自著を出版するとは思ってもいなかった。高橋社長がお元気なら連絡してお話をしたいと思い検索してみたところ、既に亡くなり会社も廃業したことがわかった。秋に三冊目の句集を出版する予定なのだが、その句集には音声ファイルの二次元バーコードが印刷されることになっている。